

老人の生活形態と要因

山上武俊

老人の生活形態と要因について述べる前に老人の周辺、とりわけ老人人口の見通しについて若干の考察を先におきたいと思う。

老人の人口の高齢化が叫ばれてから久しく時が経過したがその高齢人口の推移をたどってみるならば、昭和4年に総人口に占める60才以上の老令人口比は97%であったが、昭和50年には118%という推計が出されている。そして徐々にではあるが増加の途をたどり、昭和90年にそのピーク226%に到達する。又、第1表にあるように人口高齢化の国際比較をしてみると、総人口の比率をみると、8%から18%になるのに欧米諸国においては、50数年から2世紀かかっているのであるが日本においては40年という極く短かい期間で到達してしまったことになるが、それに対してここでは、その背景や原因については主題との関連上からもこれは省略したいと思う。

このように我が国においても高齢化社会へと移行していくであろうことが、ここで量的に実証された。そして、現実にとどのような状況において老人が生活しているのか、また将来どのように変化するのであるのか、これらについての考察を試みる。

老人の生活形態にはどのような形態があるかと言えば、それらは家族との同居とそれらを好まないか又はいやおうなしに別居という形がとり上げられると考えられる。別居の中でも少し細分化するならば、老夫婦世帯、単独世帯（いわゆる独居老人）又は、老人ホーム等の施設内老人（私は異論があるのが雑居と呼びたい）等に分けられるが私はそこまでのすべてについては言及できない。単に家族内での同居老人か、それから離脱したいわ

ゆる別居老人かに分けて、その生活形態を求めることにしたのである。

私がこれから報告する資料のあらかたは、日野市の西部地区にある老人クラブの協力を得て調査したものである。

もうすでに周知の事実であるが、日本においては家族との同居率が著しく高く、同居扶養というものが支配的である。では欧米諸国はどうなのだろうか。それらを国際比較をしてみると第2表のように対照的であることがわかる。

私が日野市の老人に同居か別居かを聞いたところは90%が同居で別居は10%である。又市の41年の調査においても同居85%。別居14%という数字が過去にある。又国（厚生省）の高年者実態調査でも同様に同居85%、別居15%これらの資料からも日本においては欧米諸国からくらべると同居率が高らかに高いことが理解される。

では、なぜ日本においてその同居率が高いのかが考察されなければならないと思う。

老人が家族との同居している理由を求めるならば第3表のごとくになる。経済的、あるいは単に面倒をみてもらうという理由にその答えが集約されてしまうのである。

何故、この二者の比率が高いのだろうか。そこには老人にとって同居するというのは、精神的な結びつきを第一の理由としてではなく、もっぱら経済的な理由によるものであり、面倒をみてもらうということは、老人自身における肉体的おとろえから起因するものであろう。換言すれば、家族と同居するというのは老人にとってはセーフティー・ゾーン（またはSecurity of living）が約束されているに他ならないと言える。だからこそ次のことが返ってくるのである。同居していることをどう思うか。答えは第4表のように、特に現状のままでよいとするものが94.9%で圧倒的多数なのである。この中でもとりわけセーフティ・ゾーンから離脱し自分達夫婦ふたりだけでこれからは暮らしていきたいと願っている独立志向型は僅かに2.9%にしかすぎなかった。このような結果からも理解されるように老人（親）にとっては、同居というものが経済的・肉体的にとってすこぶる魅力的とい

えるものではないだろうか。ここで断わっておくことは、同居・別居については 日野市の資料を参考にし論を進めたが、これらの公的調査の資料を参考にせねばならなかったのは私の調査への信頼度が低く又問題がブライベートな質問なるが為にいいまいな回答を排し、正確を期する為であることである。

次に別居のことについてふれてみたい。結果は第5表のような結果が得られその理由の一番に上げられたものは、別居することによって気楽だ、わずらわしさが無いことである。同居することによって嫁と姑との心理的・精神的な摩擦が起るかもしれないことから別居することによってあらかじめそれを未然に防ごうとする理解ある老夫婦もあれば、一方においては、子供側の都合（仕事・住居・精神的）により同居が不可能か或は拒絶されてしかたなしに別居するという場合もある。このことについては後に詳論したい。数は少ないが親の面倒みがない為に別居という不幸な例も幾つかあった。

別居の中でも、はっきりと「老夫婦だけで生活できる間は息子達に面倒をかけたくないので別居している」ときっぱり言い切った老夫婦もいた。もっとも幸福な事例として、「現在は身体の都合で同居しているが二軒家がある為に老人の希望でいったり来たりしている」というまさに理想とされる「スリーブのさめない距離」に住んでいるが、しまった老夫婦もいた。このように別居している老人が現実には子供の近くに住みたいという願はかなり強いのであるが、しかし、その理想とされる「スリーブのさめない距離」に住むのは、今日を考えればもはやそれは無理ではないのだろうか。

先程、子供側からの都合によって老人の別居を余儀なくされたと述べたが、これらについて、高幡団地の住民に答えを求めると第6表の回答になる。これらを見ると6割が仕事を結婚によって老人とは別居することになる。その別居した子供達は老人との同居の意志があるのかを問うならば、第7表のごとくになる。これは理由の別を問わず老人とは同居をしたくないものが6割に達し、老人との同居の意志があっても事情が好転しなければその可能性はうすい訳である。このように子供が自発的に別居していった場合は、老人が再び同居の希望をいだいて

もそれは困難ではないだろうかと考えられる。

最後に同居或は別居にしろ扶養されている立場にたつてあろう老人にとつては子供の内の誰にその扶養を一番期待しているのであろうか。老人側（被扶養者）と子供側（扶養者）のそれぞれの側に立って答えを求めると第8表のごとくになる。

これからも理解できるように、老人がもっとも期待をかけている扶養者は長男のみか或は長男が他の子供の誰よりも一番多く老人を扶養する。その合計をすると半数以上を超えてくる。これらを分類するならば、長男に扶養してもらうことを期待しているのは都市老人よりも農家老人にこの傾向が著しうかった。このように老人が子供に扶養してもらうのにもっとも望ましい人は長男になるが、一方においては扶養する子供側からすれば老人が期待している長男一人のみへの期待はこの調査からは扶養側と被扶養側との期待度は残念ながら一致をみない。このように老人と子供との間における扶養順位などをみても完全に相互に意識の格差がある。これはとりもなおさず扶養関係構造の変化に他ならない。その歴史的背景をさぐるならば、戦前・旧民法下における長子相続制と戦後新民法における均分相続制、又戦前における「家」の封建制に対する戦後のそれらの解体で老人の扶養においても変化を受けざるを得なかった。だからこそ、子供側の立場はそれぞれの能力に応じて全部の息子達が面倒をみるという線に落ちつくものと言える。

そして、私はこの扶養に対して二つの好対象の事例を調査から理解することができたのでそれらを紹介するならば、一方において農家の老人に代表されるように一定の年齢になり又体の自由がきかなくなった時は、隠居となつて、後の一切の仕事を息子に譲り自分は縁側で日光浴や世間話に興ずる一群の老人達と、その一方においては、子供達との生活が折り合わず、同居から離脱して狭いアパートの一室でほそぼそと生活していた老人がいたことである。これらの事例は、家族内老人を都市型と農村型という対比をさせたからである。岡村益氏がこれらについて「都市家族―核家族―雇用労働―定年―老人の孤独―経済困難」という捉え方に対して、農村家族―

参考資料

第 1 表 人口老齡化の国際比較

国 名	60 才以上の 人口比率到達年次		所要年数
	8 %	18 %	
フ ラ ン ス	1,788年	1,965年	177年
スウェーデン	1,860	1,963	103
イギリス	1,910	1,966	56
ドイツ	1,911	1,965	53
日 本	1,955	1,995	40

資料 厚生白書

第 2 表 老人の世帯構成の国際比較（%）

世帯構成		アメリカ		イギリス		西ドイツ		日 本	
		全 国		全 国		全 国		全 国	
		男	女	全		男	女	男	女
有配偶者の老人	(a) 配偶者のみと	47.7	27.7	33		49	25	11.3	4.2
	既婚の子と	17.6	7.7	13	17	8		40.6	18.1
	未婚の子と							14.5	3.4
	親 族 と	4.2	2.7	3	—	—		2.4	1.3
	非親族と							0.5	0.2
無配偶者の老人	単身で (b)	14.4	25.1	22	13	30		3.0	6.0
	既婚の子と	8.0	22.7	19	14	25		21.0	50.8
	未婚の子と							4.1	10.3
	親 族 と	7.8	14.0	10	7	12		1.8	4.5
	非親族と							0.7	1.1
	計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0		100.0	100.0
	数	801	933	2500	338	483		5207	6773
小計	老人だけの世帯(a+b)%	62.1	52.8	55	62	55		14.3	10.2

直系家族—農業における経験の重視—家長としての地位と権威—老人の心身の安定—（・は報告者）という図式が考えられると述べている。

これらをとらわけ老人の生活形態の基本的要因としてあげることができ、今後の日本においても同居率は高いであろうし、その中においても農家老人の安定した生活は変わらないであろう。

第3表 同居している理由

項 目	実 数	比 率
経 済 的	552人	53.7%
面倒みてもらふ	318	30.9
家 が 広 い	49	4.8
自分の仕事から	33	3.2
精神的なこと	27	2.6
同居の方が好都合	16	1.6
住む家がない	13	1.3
その他	20	1.9
合 計	1,028	100.0

資料 日野市社協

第4表 同居していることについて

項 目	実 数	比 率
このままでよい	562人	94.9%
他の子供と暮す	5	0.8
自分（又は夫婦）で暮す	17	2.9
そ の 他	8	1.4
合 計	592	100.0

資料 日野市社協

第5表 別居している理由

項 目	実 数	比 率
面 倒 み が な し	5 人	5.8 %
気 楽 だ か ら	29	34.1
子供の都合 { 仕 事	2	2.4
{ 住 居	3	3.5
{ 精 神 的	4	4.9
別 居 が 当 り 前	5	5.8
子供の近く { 住みたい	24	28.2
に住みたいか { どうでもよい	13	15.3
合 計	85	100.0

資料 日野市社協

第6表 老人との別居理由

項 目	実 数	比 率
・家が狭く同居が不可能な為	5 人	10.2 %
・家を長男が継ぎその為に別居をした	7	14.2
・田舎に親を残して東京で仕事している為	15	30.6
・結婚して新しく一家を構えた為に別居した	14	28.6
・独立して別居した	3	6.1
・別居は一種の流行だし、又別居の方が好都合である	1	4.1
・その他による	4	8.2
合 計	49	100.0

第7表 老人との同居の意志

項 目	実 数	比 率
・事情（例住宅）が許せば暮したい	15 人	38.5%
・今の生活環境を崩したくない	3	7.7
・嫁と姑との関係を心配して同居の意志なし	1	2.6
・親と子の相互の立場を尊重してその意志無し	20	51.2
合 計	39	100.0

第8表 扶養に対する期待度

項 目	被 扶 養 者		扶 養 者	
	実 数	比 率	実 数	比 率
・長男一人のみが	18人	45.0%	2人	3.3%
・全部の息子が	3	7.5	4	6.7
・それぞれの能力に応じて全部の息子たちが	6	15.0	25	41.7
・長男が他の子供の誰よりも一番多く	4	10.0	2	3.3
・全部の息子と未婚の娘達で	0	—	1	1.6
・全部の息子達と結婚しているにかかわらず全部の娘達で	7	17.5	16	26.7
・不 明	2	5.0	10	16.7
合 計	40	100.0	60	100.0